

# 平成 31 年漁期 イカナゴ新仔（シンコ）情報

平成 31 年 2 月 18 日  
香川県水産試験場

## 1 気象・海象

### (1) 日平均水温（図 1）

今期の屋島湾（備讃瀬戸）の日平均水温は、11 月は平年値（1988 年-2017 年の平均値）より 0.7℃程度高く、12 月以降は 1.1℃程度高く推移している。2 月 7 日発表の気象予報（高松地方気象台：<http://www.jma-net.go.jp/takamatsu/>）によれば、四国の今後 1 ヶ月の気温は 1 週目が「平年並み」、2 週目以降が「やや高め」と予想されている。従って、今後の水温は「平年並み」から「やや高め」で推移すると思われる。なお、イカナゴの産卵盛期の水温とされる 14～12℃になったのは、12 月 26 日～12 月 29 日で、平年（12 月 13 日～12 月 26 日）と比べ 13 日遅く、10 日短かった。また、夏眠終了が本格化すると推測されている水温 13℃を下回ったのは 12 月 29 日で平年より 10 日遅かった。

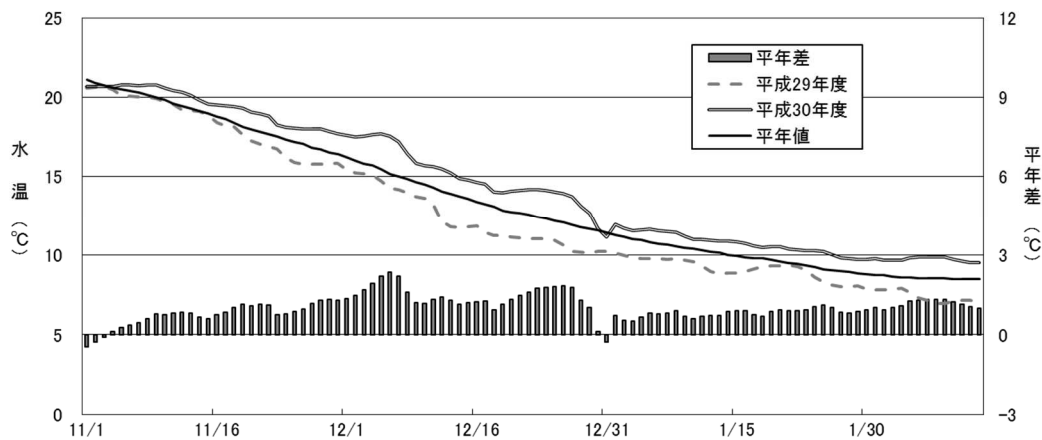


図 1 日平均水温の推移（屋島湾水深 1.5m）

### (2) 季節風（図 2）

季節風（特に西風成分）の強弱は、備讃瀬戸から播磨灘に運ばれるイカナゴ仔稚魚の量を左右し、風が強いと分散が良く生残も良くなる傾向がある。12 月以降の旬別平均風速（西風成分※）は、「平年並み」から「やや弱め」で推移している。なお、ふ化は 1 月中旬頃から本格化したと考えられる。

※1 時間毎の風向データを西成分を 1 とする西－東成分に変換し、それに風速を乗じた値を平均して求めた（東成分は除く）。

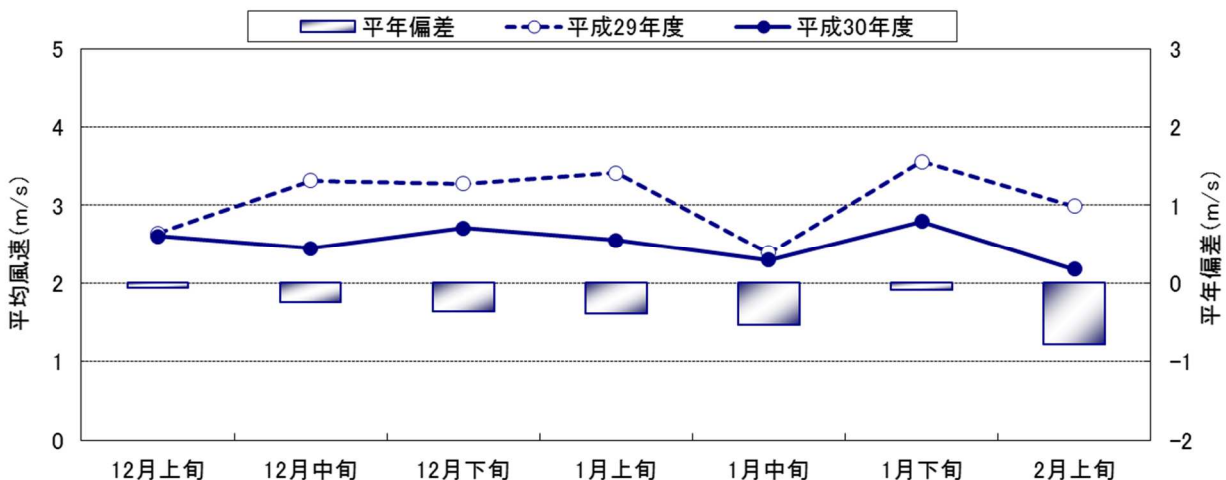


図 2 平均風速（西風成分）の推移（高松地方気象台）

## 2 親魚調査

### (1) 親魚密度 (図 3, 表 1)

平成 30 年 12 月 5, 6 (1 回目), 25 日 (2 回目) の計 2 回, 高松～庵治地先において空釣こぎによる親魚調査を実施した。速力 3～5 ノットで 1 地点 5 分びきを原則 3 回ずつ 5 地点 (図 3) において実施した。親魚密度 (空釣こぎ 1 回あたりの採集尾数) は 2.7 尾で, 昨年 4.3 尾よりやや減少した。

年齢組成は 1 歳魚が 95.7%, 2 歳魚以上が 4.3% と 1 歳魚主体であった。なお, 平均全長は 1 歳魚 100.4 mm, 2 歳魚以上 153.4 mm で, 1 歳魚, 2 歳魚以上ともに平成 18 年以降最も大きかった。

\*1 歳魚: 平成 30 年 1 月 1 日生まれを示す。

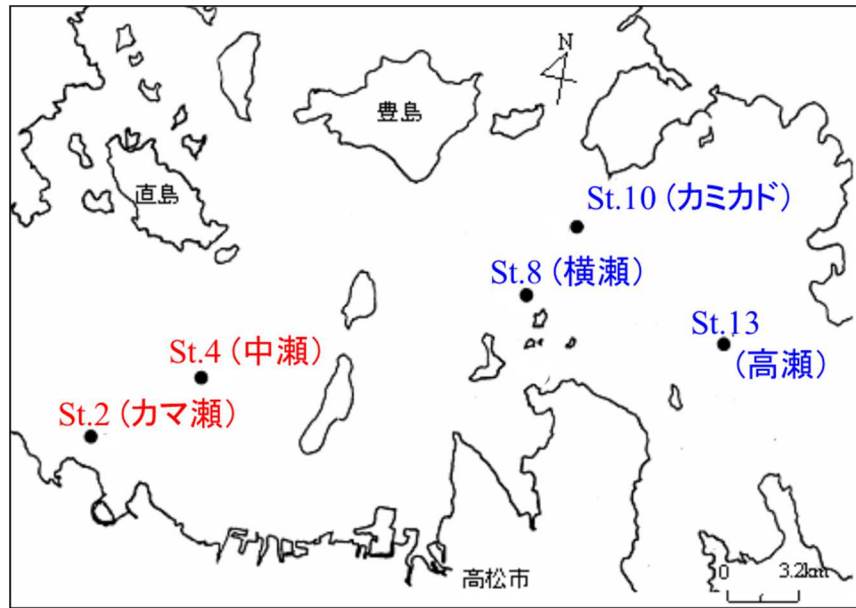


図 3 調査定点

表 1 親魚密度 (空釣りこぎ 1 回あたりの採集尾数)

		1 歳魚			2 歳魚以上			全体
		親魚密度 (尾/回)	割合 (%)	全長 (mm)	親魚密度 (尾/回)	割合 (%)	全長 (mm)	親魚密度 (尾/回)
今年度	夏季	0.9	91.7	97.0	0.1	8.3	166.3	1.0
	冬季	2.6	95.7	100.4	0.1	4.3	153.4	2.7
昨年度	夏季	2.4	100.0	89.3	0.0	0.0	-	2.4
	冬季	4.1	96.5	91.9	0.1	3.5	143.5	4.3

### (2) 産卵期 (図 4)

1 歳メス親魚の生殖腺熟度指数 (GSI (%)) = 生殖腺重量 ÷ 体重 × 100) の推移を図 4 に示した。2 歳魚以上は, 採集尾数が少ないためグラフには掲載していない。GSI は, 高松地区, 庵治地区ともに 12 月 5～6 日から 25 日にかけて増加した。

生殖腺の成熟状況および水温の動向から, 今年の産卵盛期は昨年より一潮程度遅い, 12 月末～1 月上旬であったと推測される。

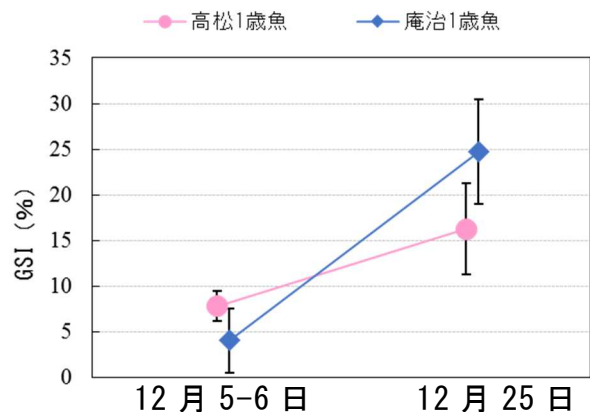


図 4 1 歳メス親魚の GSI の推移

### (3) 産卵量

親魚調査および1月下旬から実施されている込網におけるイカナゴ親魚の漁獲状況（4 2月上旬までのイカナゴの漁獲状況を参照）から、**親魚量は少ない**。しかし、例年に比べて体サイズがかなり大きく、1尾あたりの産卵量が多いことから、**産卵量は親魚量の割には多い**と予想される。

### 3 仔稚魚の出現状況（図5）

備讃瀬戸3 定点および播磨灘3 定点の計6 定点で1月後半（18日）、2月前半（5日）の2回、ボンゴネット（口径60cm）の往復傾斜びき（平成27年度より開始）を実施した。

#### (1) 1月後半調査（仔稚魚の1 定点あたりの出現数）

備讃瀬戸が平均196尾（平均全長4.7mm）、播磨灘が平均25尾（平均全長4.8mm）で備讃瀬戸において多く出現した。昨年は備讃瀬戸が平均2尾（平均全長11.4mm）、播磨灘が平均2尾（平均全長8.8mm）であった。

#### (2) 2月前半調査（仔稚魚の1 定点あたりの出現数）

備讃瀬戸が平均20尾（平均全長8.5mm）、播磨灘が平均10尾（平均全長11.3mm）であった。昨年は備讃瀬戸が平均0尾、播磨灘が平均1尾（平均全長23.8mm）であった。

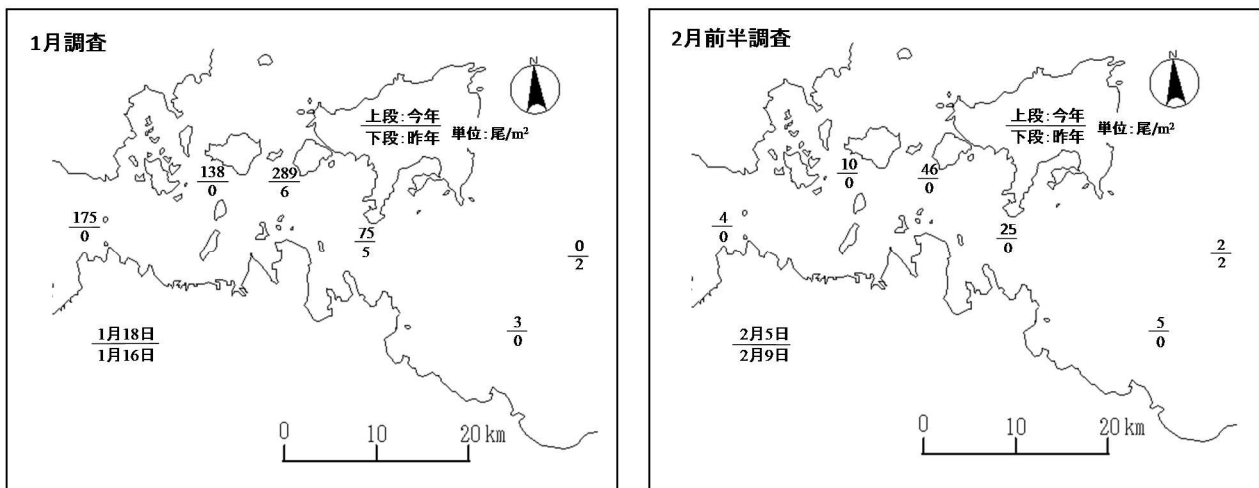


図5 イカナゴ仔稚魚の採集数（ボンゴネット面積1平方mの水柱あたり）

### 4 2月上旬までのイカナゴ（親魚）の漁獲状況（いかなご込網漁業）

高松 2月1日から操業を開始した。12日までの漁獲量は3.8トン（出漁日数：11日、述べ隻数：41隻）と低調である。2月2日の平均全長は1歳魚が106.3mm、2歳魚以上が143.8mmで、年齢組成は1歳魚の割合が96.0%であった。

庵治 2月18日から込網漁を開始したものの親魚は少なく、シンコ漁がすでに始まっている。

### 5 まとめ

親魚調査および親魚の漁獲状況から、親魚量が少ない割に産卵量は比較的多いと推測される。また、今期の仔稚魚の採集尾数は過去2か年より多いが、季節風の状況等から稚仔の分散状況はやや悪いと考えられる。

**近年、イカナゴの不漁が続いている。今期はここ数年で見ると比較的多く仔魚が出現しているが、来漁期以降継続する保障はない。イカナゴを取り巻く環境は、高水温や貧栄養など厳しい状況にあるが、今出来ることは来漁期に向けて親魚を残すことである。操業に際しては小さいうちに獲らない、早めに終漁するなど格段の配慮が必要である。**

**【参考資料】**

国立研究開発法人水産研究・教育機構 瀬戸内海区水産研究所は、備讃瀬戸の広い範囲で親魚調査及び仔稚魚調査を実施している。詳細については、ホームページに掲載されている次の情報も参照されたい。

親魚調査結果（<http://feis.fra.affrc.go.jp/ikanago/H30shingyo.pdf>）

仔稚魚調査結果（<http://feis.fra.affrc.go.jp/ikanago/H30shichigyō.pdf>）

※水産庁委託事業「我が国周辺水産資源調査・評価推進事業」の一環で実施。